※教材の表紙・内容、執筆者の肩書などは、図書教材新報第 174 号（2019 年 10 月 25 日）へ掲載した当時のものです。

教材活用シリーズ　第 123 回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果が得られるポイント（場面・方法）などをご紹介します。

主体的に学ぶ力を育む『国語科　考えるノート』の指導

㈱正進社

『国語科　考えるノート』

読売新聞社提供

石上（いしがみ）　佐知子（さちこ）

（神奈川県葉山町立長柄小学校　教頭）

小学校教諭・中学校教諭を経て現職。2015 年「学びを創る『ノート』の在り方」実践研究論文で読売教育賞優秀賞を受賞。現在、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程。近著に「近代国語教育における『ノート指導』変遷に関する通史的考察の試み～明治初年から終戦まで（1868 年～ 1945 年）」（「東京学芸大学研究論集第 40 号」2019 年 10 月）

1．はじめに

「ノート」は明治期以降、「石板」「草紙」「学習帳」等とさまざまに呼称を変えてきましたが、学習者にとっては、もっとも身近な書き記す学習用具であり続けています。ＩＣＴ活用時代における現在でもそれが変わらないのは、歴史的に「ノート」に備わる意義と機能が、学習者にも教師にも認められ、活用されてきた事実があるからだといえるでしょう。一方で、その活用方法に確信がもてず、「ただ板書を写すだけ」「漢字を練習するだけ」になってしまう場合も少なくないのではないでしょうか。「ノート」で力を育むためには、よりよい「ノート指導」が必要です。そこで本稿では、主として拙稿「近代国語教育における『ノート指導』変遷に関する通史的考察の試み～明治初年から終戦まで（１８６８年～１９４５年）」（「東京学芸大学研究論集第40号」２０１９年10月）の成果とこれまでの実践をふまえた「ノート指導の４つの要素」に沿いながら、「ノート指導」のひとつの在り方を述べていきます。史的変遷をふまえた『考えるノート』の指導で、子どもたちの言葉の力や思考力・表現力と同時に、主体的に学ぶ力を育んでみませんか。

なお、『考えるノート』は主に中学生を対象としていますが、小学校高学年から十分に活用できます。

2．『考えるノート』の指導

・指導の要素１　～いつ書くのか～

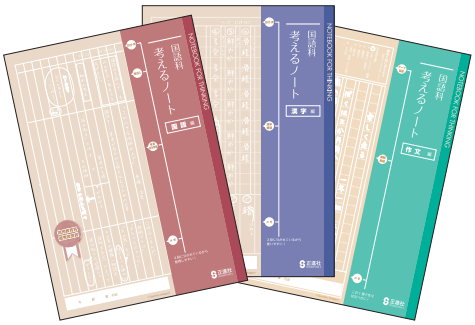
授業はもちろん、家庭での自学も含めた学習過程全体のなかで、いつ書くのかを明確に示すことが大切です。まずは授業のはじめ（めあて）と終わり（振り返り）、そして家庭でも書きたいときに自由に書くよう指導しましょう。このほか、板書を写したり、話し合いの前に自分の考えを書かせたりする等の時間も確保しましょう。

・指導の要素２　～何に書くのか～

ノートといっても、授業用のノート、漢字ノート、作文ノート等、さまざまな形式や様式があります。学習のめあてに応じて、何に書かせるのかを意図的に使い分けましょう。

・指導の要素３　～何を書くのか～

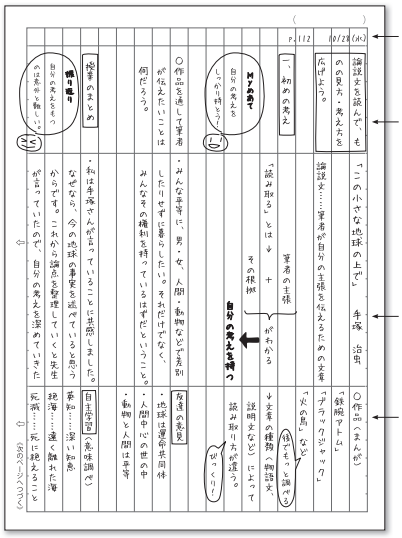
『考えるノート』国語編は、１ページが３本の線で区切られ４つの欄に分かれています。またそもそもノートの特徴として、一冊に綴じてあるための扱いやすさや、時系列で書き込むために記録（振り返り）としてのわかりやすさ等が挙げられます。この形式を活用し、欄の上か



▲『考えるノート』国語編・漢字編・作文編

ら、①日付　②めあて　③主となる学習（板書もここ）④自由な考えのメモ　を書くことを基本とし、あとは自由に工夫しながら書くよう指導します。

ちなみに、『考えるノート』の罫線の幅や4つの欄の大きさは、筆者が国語の授業を担当した中学1～3年生までの生徒たちとあれこれ相談しながら、二年間をかけて考えた「もっとも勉強がはかどる」幅と大きさです。

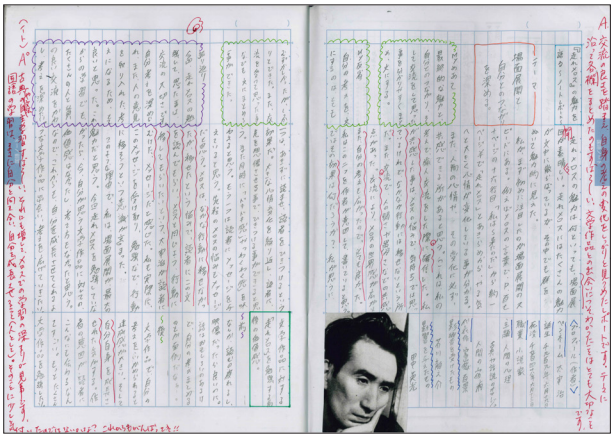


▲『考えるノート』国語編 紙面構成

・指導の要素4　～どのように書かせるのか～

ポイントは「ほどよい余白を創る」ように指導することです。各欄の余白が多すぎるとすかすかになるので、その場合は「授業中でも家庭学習でもいいから、何か書いてごらん」と促します。すると、例えば授業中は②に「めあて」や④に「友達の言葉」を、家庭学習では③や④に「調べ学習」や「授業の感想」等を書くようになります。逆に各欄の余白が少なすぎると、振り返った際に読みにくかったり、自分がポイントとして書いた事柄等をすぐに探せなかったりします。

このように「余白を創る」このことの大切さを実感させるには「ノートレポートを書く」という単元がお薦めです。単元のまとめ時に、自分のノート（記録）を振り返って、レポート（見開き2ページ）を書きまとめる学習です。これによって、自分の記録の内容やその読みやすさを重要視する態度が養われます。



▲生徒のノート例

・その他のポイント

以上は指導の基本ですが、ほかにも、無理はさせない、よいノートは褒める、単元毎やテスト毎にノートを回収し建設的なコメントを書く、生徒同士でノートを見せ合う機会をつくる、また生徒が自分のノートを振り返って自分の言葉で評価する機会をつくる等の指導が大切です。

最後に、もっとも大事なことは、『考えるノート』は型に押し込むためのノートではなく、やがて型から自由になるためのノートだということです。最初は型に沿って書くことで、書く方法を身につけることを目指しますが、最終的な目的は、型がなくても、たとえ真っ白な紙にでも、考えを深めたり主体的に学んだりするために必要なことを、自ら考え、うまく書きまとめることができるようになることです。その過程のなかで、「ノートの力」を獲得した生徒たちは、例えば書くことが苦でなくなるばかりかむしろ楽しくなったり、「いつの間にかどんどん書けるようになった」「書きながら疑問が浮かんでくる」「自分なりに（今の学習に）何が必要なのかが見えてくる」などの様子が見られたりするようになります。

3．おわりに

ノートは学びの足跡です。したがって『考えるノート』における学習の記録は、国語科の指導事項の評価はもちろん「主体的に学ぶ力」の評価に活用できます。ただし、そうしたノートの在り方は最終的には授業の在り方です。つまりよいノート指導を考え実践することは、よい授業を考え実践することにほかなりません。『考えるノート』をとおして、子どもたちの成長とともに、先生方にとっても授業力を高める一助になることを願っています。